

Title	生田長江全訳 カアル・マルクス著 資本論 第一分冊
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.2 (1920. 2) ,p.299(157)- 302(160)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200200-0157

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

支那労働者研究

小山清次氏著

新年勿々郷里より歸京せしに机上に小山君の『支那労働者研究』あり。蓋し『續支那研究叢書』第二卷として舊臘東亞實進社より公にせるものに係る。小山君が大正二年義塾理財科卒業後直ちに北清に渡り筆硯に従事する、傍支那事情を究め、殊に苦力生活に於ては何人の追隨をも許さざる活知識を有することは、世間自ら定評あり。かるが故に余は新年第一の好讀物として之を迎へ直ちに之を閱了したり。

本書は之を五編に分てるが第一編労働及生計第二編労働制度は實に全冊の一半を占め實に本

書の眼目たり。殊に労働者の團體苦力幫の組織機能等の説明に至りては本書を措きて他に容易に之を求む可からず。小山君が序文に於て『就中支那労働者の労働生計労働争議等に關する研究は大正二年八月より翌年四月に至る九箇月間著者自ら數十名の支那苦力より成る一種の幫を統率し一個の苦力頭として天津老車站構内の苦力小屋に起居し或は幫を代表し幫屬苦力の労働條件に付雇傭者側と折衝し或は労働上の協調又は争議に際し他幫の支那苦力頭と直接交渉の任に當り其の間實際に經驗せし所に係る』と云へるは決して自畫自贊の言にあらず苟くも支那に於て事業を試み若くば他日支那の労働者を我國工場に使用せんことを思ふものは先づ本書の前半を熟讀するの必要あり。

第三編は労働者の國內移動を説き第四編は國外移住を説けり。滿蒙の拓植政策は支那政府の

最も重きを置ける處にして第三編の記事は能くその事情を明にせり。労働者の國外に移住せるもの即ち僑工の研究は支那民族の勢力を知悉する上に於て必要缺く可からず。本書は南洋及後印度、北米合衆國、南米及西印度、英國植民地大洋洲諸島の數章に分て之に就て詳述せり。なほこの問題に就て研究せんことを思ふものはツアン・サンデック氏が一九〇九年に公にせる *China neezen buiten China* の如き有益なる参考書を手にすることを得可し。但し支那労働者の國外出稼のうち於て殊に興味ある問題は労働軍の遠征にして小山君は本書の第五編大戦と支那労働者に於て詳細なる記述を之に與へ露國遠征の労働軍がボルシェー主義に感染して歸來せること迄叙述を進め支那國民性とボルシェー主義の關係を以て本書を了れり。尤も支那にては勞兵匪三者は常に有無相通するが故に附録として支那

の土匪に就てその一斑を説明せり。蓋し支那事情を説くに方りて本書の如く用意周到材料豊富にして記實正確なるものは他に容易に之を求め難かる可し。強て難を云はゞ目次繁瑣に互り學究的に過ぎたり、章の區別は必要なれど節の細分は餘りに忠實に研究勞作の跡を公表せりと云ふ可し。兎に角本書と云ひ既刊の『支那の政黨』と云ひ『續支那研究叢書』の編輯者が忠實なる研究者の手に之を託し得たるは真に喜ぶ可し。

(田中萃一郎)

生田長江全譯 資本論(第一分冊)
カアル・マルクス著

綠葉社發行 四六版
本文二三三頁定價金二圓二十錢

左右を顧ることなくして極めて大膽なる論斷を下すを以て名ある田中(萃一郎)博士は「オーエン一流の舊社會主義は即ち一種の社會改善論にして何人も異論なしと雖も、マルクスの新社會

會主義に至つては、社會革命論にして、祖國より放逐せられて、國外に流寓せる亡命者の所説なり、世俗と相容れず、常に怏々として樂まざりし不名家の所論なり、身に一定の職業なく、唯だ徒らに局外より事業界に批評を加へて、以て高しとせる不良游民の意見なり」との説を作せり(「改造」第一卷第四號)。吾人はマルクス全盛の社會に於て、此の忌憚なき罵倒を彼れの社會主義に加へたる博士の意氣を壯とすると共に、此の種の言を以て、獨斷にして放縱なる感情的毒語として之を排斥するに躊躇せざるものなり。然れども吾人はマルクスが歴史哲學を説くに當り、人間社會の進歩の上に作用する精神的要素の作用を閑却すること餘りに甚しきに過ぎたるの事實を認めて、「マルクスは社會主義に魂を入るゝことを忘れたる男なり」と觀るに於て阿部(秀助)教授と一致するものなり(同誌同號)。而

して經濟史上に貢献したる彼れの功績を承認し人心煽動家として、其の偉大なる感化を知悉すると同時に、純正經濟學に對する彼れが特殊の貢獻を尊重すること大ならざるものなり。更らに又た彼れの名が過去凡そ一世代以上に亘りて社會主義的思想を代表して立つの觀ありしを認むると共に、今や彼れの「資本論」が既に社會主義者に取りて其の舊約全書たるの地位に降れるの事實をも承認せざる可らず。遮莫吾人は此の書を以て人間の經濟生活史上に絶大なる影響を齎したる一大紀念碑として、永く永く之れを仰視せんとするものなり。吾人は此の點に於て、社會批評家としての立脚地がマルクス派のそれより遠く隔れるを自ら想像しつつある生田長江氏が、「半ば氣味悪くも、半ば武者震ひしながらも」本著を全譯するの大事業に着手せるを喜ぶものなり。(本書譯者序文八頁)。

「資本論」邦譯の諸計畫に就きては福田博士の物語る所、詳かなり(國民經濟雜誌所載、マルクス全集内容解説轉載一九頁)。而して夙に出づ可くして出でざりし其の邦譯が最近に至り俄に相踵いで其の着手を見るに至りし理由は三邊教授之れを説明して遺憾なきが如し(「解放」第七號)。生田氏の譯は松浦氏の譯、既に出で、高島氏の譯、將に成らんとするの際に現れたり。而して生田氏は前に出でたる松浦氏譯に對して多大なる遺憾を感じ、其の誤譯の指摘を行ふと共に(「改造」第八號)、後に來る可き高島氏譯に對しては深甚なる敬意を表せり(本書譯者序文四頁)先に進む者は災あり、高島氏亦た松浦氏の譯文を難じて之れを「全誤譯」と做せり(「解放」第六號)。而して最近の新聞廣告は松浦氏も應て自己の譯本第二卷に於て「解嘲」一篇を草せりと傳ふ。雜誌「解放」は其の謂ゆる「マルクス出版界

を壓倒する資本論解説」に於て、高島氏が譯筆の明快簡潔を推稱すると共に、生田氏の「資本論」を以て「冗漫で、厭味たつぶりな、あまけに晦澁難屈」なるものなりと記せり(同誌第二卷第一號)。松浦氏譯は吾人未だ之れを緝くの機を得ずと雖も、生田氏譯に對する如上の批難に至りては、恐らく此の社會主義の聖典の翻譯出版を企圖したる資本的出版業者の競争より來りたる不當の言なる可し。吾人は寧ろ生田氏を以て「翻譯界の權威、兼ねて評論家の雄」なりとして推薦し、併せて、「譯文の精緻明快は云ふまでもなく、(中略)、正に世人多年の期待を充すに足る好翻譯書」と做せる公平なる第三者たる三田文學記者の言に賛せんとする者なり(同誌第十卷第一號)。各譯者は孰れも皆な、マルクスと共に(第一版序文九頁)、我れ自らの道を行き、人々をして其の心の儘に言はしむ可きものなり。

殘忍なる「階級闘争」が若し果して此の世を頽廢より免れしむ可き歓迎す可き進歩の働因として觀得可くんば、激烈なる「出版競争」も亦た、學界の不振を救治するの一助とも稱し得可きか。

生田氏譯は原著訂正第四版を底本とし、傍ら英譯本を參照したるものなり(譯者序文五頁)。而して第一分冊は原著者(マルクス)及び原著刊行者(エンゲルス)の序文並に本文第一卷第一書第二編第四章第三節「勞働力の購入及び賣却」に至るまでを譯載し、併せて原著者の註釋を附し、更らに堺利彦氏の跋を添へたり。跋文は其の終末に於て「大正八年十一月、元帥大將從一位大勳位前總理大臣伯爵寺内正毅君薨去の日」と特に誌せり。蓋し、かの官僚政治家死去の報は此の社會主義の老先達の耳には社會のファサードの破滅を示す象徴として響きたるものなる可きか。マルクス全集の出版を企圖したる面家莊侍

氏が果して福田博士の謂ふが如く、エナのドクトル・グスターフ・フレイシャーを想起せしむるものとせば、綠葉社主は當さにハムブルグのマイスホルなりとも稱し得可し。吾人は譯者及び出版者が輕浮なる動機よりして其の事業に着手せるに非ざるを信ずると共に、其の不撓なる努力に依りて之れを完成せんことを禱るや切なり

(高橋誠一郎)

三田學會雜誌 第十四卷 第三號

論 說

デヴィッド・ヒュームの貨幣論

高橋誠一郎

洵に Karl Menger の言へるが如く貨幣の漠然たる現象は今日に於てすら満足す可き説明を有することなく、又た其の本質及び職能の最も根本的なる諸問題に關しては未だ一致の存することなし。今日に於てすら、吾人は何等満足なる貨幣學説を有することなきなり(Economic Journal, 1892, p. 240)。

マーカントリズムの時代に於て、貴金屬の夥多を以て國富の尺度として注視せ